

プラトンとディオニュシオス

パイデイアの悲劇

W・イェーガー
村島義彦訳

ここ一〇年にわたる文献批判研究は、長らく偽作と見られてきた『第七書簡』と『第八書簡』を、プラトンの正銘の自己証言であると立証した。これと同時に、プラトンのパイデイア史に重要な一章が付け加えられた^①。なるほど、この哲学者（＝プラトン）と当時の最も強力な僭主（＝ディオニュシオス）の交流という外的事実は、否定されるべくもないだろう。われわれがたとえ、これら書簡　わけても『第七書簡』　を介して、第一級の自伝的証拠とよりはむしろ、抜け目のない文学的サギ師　偉大なプラトンを時局の傍らに連れ出すのは、

やり甲斐のある小説テーマだと考えるような　のまことに刺激的なフィクションと関わり合っているにしても、やはりそうなのである。なぜなら、われわれがここで第一に扱っている『第七書簡』の資料価値は、いまだ圧倒的に偽作の疑いの濃かった当時ですら、疑問の余地はなかつたからである。ともあれ、この書簡に、シユラクサの悲劇へのプラトン自身の意見表明を読み取るのは、歴史観察者には最高の魅力といえる。そのため、この事件をドラマチックに脚色したプルタルコスの「ディオンの生涯」も、プラトンの『第七書簡』という本源がもつ

内から入り出る精彩に比べて、いささかも見劣らない。

『第七書簡』がなかったにしても、われわれは、『国家』と『法律』の著者が、現実政治への真に偉大な情熱本源的に行為へと駆り立てるに鼓舞されてい

たにちがいない、とは推論するだろう。この点は、単に心理学的に明らかでなく、プラトンの知の概念それ自体の構造からも明らかである。というのも、ここでの知（グノーシス）は、単に生から切り離された純然たる考察とは解されず、技術を意味するテクネーや、正しい道・正しい決意・真の目的・本当の善についての思慮分別を意味するプロネーシスとなっているからである。わけても理論的な形態　プラトンの後期対話篇でのイデア論　においてさえ、これは変わらなかった。活動領域が、外なる国家から「われわれの内なる国家」にいつそう狭められた時でも、かれの場合、そもそもその力点は常に、行為（ピオス）に置かれていたからである。『第七書簡』では、今やしかしプラトン自身が、大ギリシア（マグナ・グラエキア）に最初に旅立つ　これは、シユラクサの僭主の宮廷へも導いた　までの自

らの内的発達がいかにあつたかを、われわれに語っている。この報告では、国家への実践的関心こそ青春期の支配要素であつた、と率直に明かされている。『第七書簡』の叙述の妥当性は、プラトンの主たる作品やそこでの政治的な目標設定を少しでも考えるなら、さらにはまた、かれが、自らの家族メンバーからより親密な人物を選んだ、『国家』と、同じく三部作に属する『ティマイオス』の問答風景に組み入れた事実からも、確認される。これによつて、疑いもなくかれは、自分自身　著者としてむろん完全に劇の外にいたってはならない　に、さらには、ソクラテスと自分の関係に、間接の光を投じようとしたのである。プラトンの兄弟であるアディマントスとグラウコンは、『国家』では、政治に熱心なアテナイの若者の代表格として登場する。グラウコンは、早くも二〇歳で国事に携わろうと欲し、ソクラテスの手でかろうじて引き止められる。プラトンの伯父のクリティアスは、前四〇三年の革命を指揮した悪評高い寡頭政治家である。この伯父をプラトンは、再三にわたつて問答相手に起用した。さらには、当人にちなんで命名した作

品(『クリティアス』)を、かれに献じようと企てた。この作品はしかし、『国家』に始まる三部作を締めくくる手筈であったのに、いまだ断片に留まっている。プラトンは、基本的にはおそらく、政治的関心からソクラテスに近づいたのだらう。この点は、かれ以外のソクラテスの弟子たちも変わらなかった。クセノフォンは、クリティアスとアルキピアデスについてこう語った上で、まことに正しくも、かれらはしかし、ソクラテスの政治教育がどうしたものかを知った時、すぐに失望に駆られたと付け加えている。^③ソクラテスの政治教育はしかし、プラトンという相應しい土壌に蒔かれ、果実であるプラトン哲学を生み出した。ソクラテスこそ、国家と教育の新たな盟約をプラトンに案出させた、否、国家と教育をほとんど同等視した張本人であった。とはいえ、当のソクラテスは、国家と争って死を宣告された。プラトンにとってこれは、新しい国家が、人間を哲学的に教育するってこれによって人間共同体は全体として根底から変換される。ことではじめて実現される、のを物語る何よりの証拠であった。かなり初期に獲得され、のちに

プラトンとディオニュシオス

『国家』で依拠すべき原理に据えられたこの確信を胸に、プラトンは、シュラクサに赴いた。『第七書簡』の供述によれば、それは前三八八年、およそ四〇歳の頃であった。この地でかれは、シュラクサを強力に統治していた僭主の親戚で友人のディオオンに会い、その燃えるような高貴な魂を、自らの教えて完全に虜とした。^④ディオオンは、ディオニュシオス 世にも自己の理想を認めさせようとしたが、この企ては、むろん失敗せざるを得なかった。冷静に計算する現実政治家のプラトンが、真摯な情熱家のディオオンに示した偉大な人間的信頼に励まされて、ディオオンは、プラトンを僭主に紹介した。この信頼はしかし、ディオオンが、駆け引きに富んだ政治家の世界を僭主と同じ目で眺める力を備えていたからよりは、かれ自身が絶対に誠実であり、その性格が純粹であったことに因る。プラトンは、『第七書簡』で、ディオオンがディオニュシオスに要求して、僭主たるもの、シュラクサに憲法を制定し、この国を最高の法律で治めなくてはなりません、と語ったと述べている。^⑤けれども、ディオニュシオスの見るところ、シュラクサに独裁者を生んだ当の事情

四三

がこうした政策を許さなかった。プラトンはしかし、この政策こそ、イタリアとシケリアでのディオニュシオス王国に本当に固い地盤をはじめて与え、これを継続させ、意味あらしめるだろうと信じていた。ディオニュシオスの方は、この政策が逆に、まもなく王国を崩壊させ、次いで、王国から部分ポリスに解体したシケリアのポリス群を、無力にも、カルタゴの侵略に新たに晒さだろうと確信していた。このエピソードは、プラトン、ディオニュシオス、世がのちに演じた悲劇の序曲にあたる。息子で後継者であったディオニュシオス、世は、疑いの目を向けた相手がディオノンでなくプラトンであった点で、ディオニュシオス、世とも似ていなかった。プラトンは、この大きな体験で賢くなってアテナイに戻った。そしてまもなく、自らの学園アカデメイアを創設した。けれども、ディオノンとの関係は、こうした不首尾ののも途絶えなかった。とはいえこの不首尾は、プラトンを促して、すでに『弁明』でも語られた、あらゆる積極的な公的活動からの引退を遂行させたにちがいない。ディオノンとプラトンの間には、生涯にわたる友情が生じた。

しかし、プラトンはこれ以後、哲学の教師としての活動に完全にわが身を振り向けたけれども、ディオノンの方は、シケリア僭主制を政治的に改革する、という自らの理想をしぶとく握りしめながら、この理想が、おそらくは有利な条件下で再び実現されるのをじっと待ち続けた。

こうしたチャンスは、ディオニュシオス、世が死んで（前二六七年）、いまだ年若い息子が権力を受け継いだ時点で到来したように思われる。プラトンの『国家』は、そうした頃に、つまりは前三七〇年頃に、公刊された。これを介してプラトンは、ディオノンの信念を改めて強化したにちがいない。ここには、かつてディオノンが、プラトンの口から直接に告げられた思想が古典的な装いで顔を覗かせていたからである。『国家』は当時、出版されて日も浅いのに、論議的のとなっていた。この中でプラトンは、なるほど、最善の国家がいかにして実現されるか、の問題にくり返し触れていた。とはいえかれは、こうした問題が哲学的パイディアの実施に不可欠というわけではないため、これを、脇に押しやっていた。最善の国家は、地上ならぬ天上に、おそらくは理想の範型と

してのみ存在するのだろうか　こうプラトンは記して

いた^⑥。その種の国家は、現実が生じた例がギリシアになかった。あるいは、どこか見知らぬ彼方に、ギリシアがいまだ知らないバルバロイ　つまりは異国の

民たち　の下に存在したかもしれない。(ヘレニズム

期に入って、新たなオリエントの民たちがギリシア人の歴史圏に登場し、自分以外の民の存在がより詳しく知られ始めた時、学者たちは、プラトンのこの推測に励まされて、プラトンのパイディアの原型ないし類縁型を、エ

ジプト人の階層国家や、モーセの創造した祭政一致のヒエラルキー国家に見いだそうとした。)プラトンは今や

こう要求する、教育は、各人の内にある正しい国家を重視すべきであつて、今日の歴史的国家がどうした状態にあるかなど、どうでもよいのだと。^⑨かれは、当時の国

家を治癒不能と見放した。^⑩かれの思想を実現する上で、そうした国家は問題にならなかつた。理論的に眺めるなら、国家を改善する土台としてかれが要求した統治者教育を、たった一人の人間に試みるのは　この人間が

本当に神々から遣わされた存在と仮定するなら　、

プラトンにはとりわけ簡単なように思われた。これは、

複数あるいは多数の人間より、たった一人の人間を改変する方がいっそう簡単だ、という数学的根拠に基づいて

いる。^⑪この場合にかれは、権力への問いから出発してい

ない。プラトンはしかも、晩年にも『法律』で、一個人の手に権力が集中してはならないと指摘していた。^⑫崇高な精神と道徳を備えた僭主に、国家の統治をゆだねるといった『国家』の思想は、むしろ、完全に教育的な姿勢から芽生えた。^⑬なるほど、一人の人間の手ですぐれた精神を国民全体に行き渡らせるのも、同じく可能であつた

にちがいない。とはいえプラトンは、ディオニシオス

世の専制下で、これとは逆に、一人の権力者が、組織的な影響力を用いて国民全体の性格を台なしにした現実をリアルに体験していた。『国家』での好感のもてない僭主の姿は、明らかに、老ディオニシオスの輪郭を備

えている。その姿は、ディオンを落胆させたし、さらには、かれの改革計画に異を唱えているようにも思われる。とはいえ、この種のひどい人間的弱点を体験して、それを元に人間性への信条を形造つて、よりよい未来への道

をそっくり閉ざしてしまうのは、合点がいかない。いずれにせよこれが、シユラクサの僭主が死んでのち、道徳的な理想家ディオオンが、プラトンを手紙攻め・報告攻めにして、どうかこの機を逃さずにシケリアに向向いて、最善の国家をめぐるあなたの理想を、新しい統治者の手助けを得て実現して下さい、と懇願した時、プラトンの熟慮した中身であった。^⑭プラトンは『国家』で、世俗的権力（デュナミス）と哲学的認識（ピロソピア）

この世ではたいいてい絶望的に切り離されているの結合こそ、理想とする主張内容を実現する前提条件だと説明していた。^⑮この結合はしかし、特別な運命の組み合わせ わせ つまりは神的な幸運（テュケー） によってしか生じない。^⑯ディオオンは、プラトンに呼びかけ、若いディオニュシオスの僭主就任こそ、まさにこの予期せぬ組み合わせとすべきで、こうした時代の呼びかけに感じないなら、あなたの理想を裏切ることになるだろうと何とか納得させようとした。^⑰

ディオオンのような理想家でも、プラトンの主張内容が、比較を絶した例外者の個人的意識から生じたことぐらい

は、むろん気づいていた。こうした主張を、今ある国家で実現しようとすれば、統治された大衆の無意識の諸力に期待することはできない。これら大衆の汗は、むしろ逆方向に流されたからである。^⑱プラトンは、大衆から何も期待しなかった。大衆は、かつての組織的国民から機械的群衆に変容していたからである。幸運（テュケー）が鼻肩するなら、ほんの一握りの人間のみが最高の目標を手にできるだろう、若い統治者（ディオニュシオス世）は、ここでの一握りに属しているはずだ、それゆえかれが、最高の目標を手にできたなら、シユラクサ王国は、地上での至福の国家となるだろう。ディオオンはこつ信じていた。^⑲こうした計画では、僭主のもつ無制限の権力こそ、唯一つの実際の確かな事実であった。この権力は、僭主がそれをどう用いるのか誰も知らなかったから、不気味であったにちがいない。ディオオンの信念はしかし、まことに大胆にも、ディオニュシオスの若さを頼みとした。若さは、陶冶可能性を意味する。プラトンが理想の統治者に要求した道徳的・精神的に円熟した見識は、経験の浅い若者にいまだ欠けているにしても、こ

こにはしかし、プラトンの理念を実現する唯一つの可能な手掛かりが与えられているように思われる。

『国家』ではプラトンも、最善の国家への道は、完全な統治者の養成を措いてないと見ていた。そしてかれは、教育の基本線を定め、この基本線を理想として固定する課題を、自分自身に　　つまりは創造的な哲学者に

割り当てていた。とはいえ、プラトンが前もって見せてくれた統治者教育に手を染めて、しかるべき成果を上げるに足る人物など、当のプラトン以外に　　つまりは精神的なイニシアティブに溢れたこの不可侵の人格以外に　　そもそも誰が考えられようか。プラトンの『国家』では、なるほど事情が異なっている。そこでは、未来の統治者の教育は、哲学的認識と實際生活の両面に及んだ、生涯にわたる困難なテストと選抜のプロセスを介して成就される。選抜の対象は、若者全体の中の優秀者一般である。その人数は、段階を経ることに減少し、ついには、ほんの一握りあるいはたった一人が残されるのみとなる。そしてかれは、神のお気に入るような偉大な仕事を果たすべく、召喚されるのである。こうし

た学校から生まれる統治者は、現にある僭主とは正反対の人物であるだろう。かれは、永遠の真理に照らして捉えた全体の幸福を最高規則としておのれの内に保ち、こうして、あらゆる個人的見解や願望の一面性を越え出るだろう。シュラクサの統治者は、柔順で、天分に溢れ、陶冶可能性に富んでいるかもしれない。けれどもかれは、歴史的偶然が、かれを王位継承者に選んで最高権力を付託した、という他でもないこの理由から、おのれの課題に選ばれたのであつた。こうした状況は、イソクラテスの意味した君主教育の場合と基本的にそう異ならなかつた。ディオンはしかし、今のこの瞬間に最大の努力を払うのが必要だと考える。それは単に、ディオニュシオスの強大な権力が、成功の暁にはいつそう大きな成果を約束するからでも、あるいは、この偉大な王国でのかれ自身の絶対的地位を考えたからでもなく、²⁰何はともあれ、当のディオスが、プラトンの人格に触れて人間全体を大きく変容させた、かつての自己体験を介して、教育の力へのプラトンの信仰を吹き込まれたからであつた。

こうした状況をふり返りつつ、プラトンは『第七書簡』

で、ディオンの生涯の主な事件と、この天分豊かで高貴な友　いまだ生々しいその死はプラトンを嘆かせた

と一緒に歩んだ個々の道程を、改めて眺め直している。権力を引き継いだ時点で始められた僭主教育の企ては、二度のスタートののち、失敗に終わった。とはいえ、ディオニュシオスの強大な国家も崩壊した。こうした教育に失敗してのち、ディオンは、僭主から追放され、ついには武力行使に訴えたからである。だが、ディオンのもまた、僭主への勝利を長く味わうことはできなかった。短い統治ののち、かれは、おのれの陣営内の不和の犠牲となつて暗殺されたからである。暗殺の後に記されたプラトンのいわゆる書簡(『第七書簡』)は、ディオンの行為への、公表を意図した説明であり弁護である。こうした説明と弁護はしかし、ディオンの息子やシケリアでのかれの信奉者に、死者の掲げた理想を忠実に保持するよつに、と助言する体裁を装っている。プラトンは、この助言が守られるなら、あるいは忠告によつて、あるいは影響力を用いて援助しようと約束している。こうしてかれは、ディオンの立場を受け容れ、その当初の計画に賛

同する。ディオンの目指したのは、僭主制の確立でも、その転覆でもなかった。かれは、僭主から被つた不正のゆえに、武力行使に及んだのであった。その咎は、もっぱら僭主にあった。たとえプラトンが、のちに、自らの第一回目のシユラクサ訪問が、ディオンのプラトン哲学と触れる機会を与えたという意味で、とどのつまりは、僭主制を転覆する動因となつたのだと見たにしても、この点は変わらない。^②かれは、こうした事件の歩みの中に、神的なテュケー(運命)の支配を察知する。それは、同じ頃に執筆していた『法律』で、かれが、神の教育学を歴史の内に辿つたのとよく似ている。おのれの過去をふり返つて、プラトンは、自らの人生と当時の歴史が結びつく中に、少なからず、テュケーの支配する痕跡を明らかに見る。統治者が哲学者となるか、あるいは逆に、哲学者が統治者となるケースを実現できるのは、あくまでも神的なテュケーを措いてない。このことをプラトンは、すでに『国家』で口外していた。ディオンの、プラトンとディオニュシオスを引き合わせた時、テュケーは、その手を差し伸べていたように思われる。統治者が、テュ

ケーを認識しないでその手を拒むなら、因果の連鎖を悲劇的結末に導くのも、やはりテューケーであった。とはいえ、常識（コモン・センス）としてはまず、ディオンの企て。そして、かれに名を貸していたのがプラトンである以上、間接的にはプラトンのそれ。が失敗を宣告されたのは、それが心理学を欠いていたからで、つまりは、平均的な人間本性がいかに虚弱で、いかに低劣かを正しく洞察できなかったからだと結論されるだろう。プラトンはしかし、こゝは考えない。自分の教えを介して、ディオンのような力ある人物がかつて行動に赴いたのだから、はるかに弱いとはいえずディオニコシオスが、最高の意味での自らの課題を果たすチャンスを拒むとすれば、それは、おのれの統治者としての本能を否定することになる。およそこのように、プラトンは考えるのである。

こゝしたドラママでのプラトン自身の役割は、その場合、自由意思に基づいた振る舞いとは思われない。かれはより高次の力の道具なのである。自分＝神の道具、といった自己把握の哲学的背景は、『法律』の内に見られる。

ここではプラトンは、くり返し、人間が神の手で操られる玩具であり、人形芝居の操り人形であると説明している。とはいえ、操り人形なら、どうすれば正しく演じたことになるかを理解しなくてはならない。そして、人間の衝動に属する情念は、必ずしも常に、神の操るカラクリの糸に喜んで従うわけではない。ともあれこれが、ギリシア人の抱いた人間生活の基本イメージなのである。人間生活は、すでにホメロスの叙事詩でもギリシア悲劇でも、常に、より上位の生活。つまりは神々の劇場

と関係つけて示されている。目に見えないカラクリの糸は、こゝした上位の世界から伸びてきて、われわれが出来事と名付けるものに結びつけられる。この種の糸が、いたる所で芝居を導いているのを、詩人は鋭くキヤツチする。『国家』²⁸では、なおいまだ、万物を司る神の原理。つまりは善。と現実の人間生活が、大きく切り離されているように思われる。プラトンの関心はしかし、イデアの側に、つまりは、目に見える王国ですなわち歴史で、実生活で、具象の世界で。イデアの働きがどう成就されるかに、いつそう振り向けら

れる。かれのイデア論と同じく、實際生活（ヒオス）の叙述においても、形而上学的要素が、感覺的個物中にますます浸透しはじめる。『第七書簡』は、プラトンの世界解釈のそもそもの源が、自らの人生と行為の意味把握に向けた格闘の汗にあるのだと、われわれに、大々的に打ち明ける意味でも重要である。こうした個人的要素は、故意に隠されているとはいえ、すでに『国家』でも跡付けることができた。ここでは、ひたすら転落していく環境世界と文化の只中で、「哲学的本性」を維持できるのは、神的テュケー（運命）の救済措置による、と感じられているからである。『国家』や『法律』や『第七書簡』で、権力と知性 統治者と賢者の姿をとった

の出会いすら、この種の神的摂理の個々の行為だと解釈される時、これによって何が意味されているかは、実に、こうした観点からのみ完全に理解される。シケリアでの企ても、この観点に立てば、『国家』に描かれた当時の哲学者の状況に結びつけることができる。この企ての意味は、単なる自伝的次元をはるかに越え出ている。哲学者が、この世では無用の役立たずであるという一般

的経験は、実のところ、この世の破産宣告であって、哲学の劣悪性を証明するものではない。このことは、直接に『国家』での教えを例証している。

ディオンは、シュラクサを訪問してほしいとプラトンに求めた時、プラトン当人が『国家』で世に問うた政治哲学を、王位の交代劇で生じた状況下で実現するのが自分の課題であると語った。その場合には、いわゆる体制の交代が当然に考えられるだろう。プラトンはしかし、『第七書簡』できっぱりと、わたしが招かれたのは、無責任な政治助言者になるためではない、若い統治者を教育したいという意図と明確な使命をもっていったからだ、と語っている。ディオンは、自らの課題を右のように定式化したけれども、この定式化は他でもない、かれが、プラトンの『国家』を移行に移そうと考えていたのを物語っている。というのもプラトンは、『国家』で、最善の国家を叙述して、あくまでも端的に完全なパイディアの実現体と語っていたからである。ディオンのには、統治者のあるべき姿がすでに与えられていたので、ディオニユシオスは、選抜を介して守護者階級から登場する代わ

りに、すでに就いている役職に向けて、遅ればせながら支度される必要があった。これはしかし、プラトンの要求への強い制約であった。為すべき作業は、下から上に向けての代わりに、上から下に向けて開始されなくてはならなかった。ディオンは、プラトンに宛てた書簡で、ディオニシオスという国守が「哲学とバイディアを切望する」有能な本性を備えている、と叙述した²⁵。プラトンは『国家』で、教育を成功に導くわけでも本質的な事件は、それが展開される環境の雰囲気であることを証明した。これはしかし、不利な予想を生まざるを得なかった。というのもプラトンは、『第七書簡』のまさしく冒頭部分で、最初のシケリア滞在ののち、「この地の慣習や、僭主の宮廷の雰囲気について、そもそもどうした印象を抱いたかを、ドラマの解説のように感動的に叙述していたからである。加えてかれは、ディオオンが押し進めていた冒險的企てを前にした恐れも叙述して、その恐れを、若者はなるほど容易に点火されるけれども、その後には払われる努力もさほど長続きしない、という自らの教育的体験で根拠づけているからである。プラトンは、ディオ

ンの信頼するに足る人格と十分に円熟した年齢こそ、いかなる時でも自分が頼ることのできた唯一の不動点であると、はつきり知っていた。ディオンの招きに応じたい、つそう重要な動機は、こうした招きを拒むなら、自らの教えを実生活に活かす好機を、原則的に放棄するのと同じ意味になるだろう、という認識であった。プラトンは、『国家』ではしかし、自らの思想の実現可能性を問われて保留を口にしてきたものの、ここまで遠く踏み出さなかった。かれは、ここに示した最終の帰結を前に後退し、自分が行為に及んだのは使命の成功を信じたからではなく、単に言葉のみ（ロゴス・モノ）の人間に留まるのを恥じたからである、とは進んで認めない。『国家』でわけても感動的に述べられた諦めは、なるほど基本的にはすでに、自らの退避からの抜け出しを問われて否を語っていた²⁶。プラトンは今や、あまりに正しい自らのペシミズムを自らの行為で反証する試みに、おのれの名声のすべてを賭けた。かれは、自らも口にするように、「自分には徹底して相応しかった」アテナイでの教師の仕事を去って、かれの哲学観とは断じて相容れない僭主制の

勢力下に赴いた。³⁰とはいえプラトンは、こうした仕方では、
 歓待の神ゼウスへの不敬から、そして結局は哲学という
 自らの職業　これはもつと楽な道の選択を許さなかつた　への不敬からも免れたのである。

プラトンと僭主の関係は、『第七書簡』では完全にこ
 うした光に照らして、すなわち、弟子の所にやってきた
 師の関係として眺められている。かれは、到着してすぐ、
 自らの心配がすべて裏書されているのを見た。統治者か
 らディオーンへの中傷は、すでに、疑いと不信に満ちた立
 ち入りがない雰囲気や宮廷内に生み出していたので、プ
 ラトンがディオニュシオスに与えた強い感銘も、宮廷人
 たちのディオーンへの妬みをいっそう強めたにすぎなかつた。³¹父親のディオニュシオス　世は、当然ながら、デ
 イオンを人間的に信頼していた。けれどもかれは、プラト
 ンがディオーンを感化しないように、この哲学者をアテナ
 イに送り帰した。気が弱い息子の方は、ディオーンに敵対
 する連中や激しく嫉妬する連中　ディオーンに優る力
 を手に入れようと欲していた　がそつと耳打ちし、
 デイオンはあなたを追い出して、おのれの哲学的な改革

理念にかこつけて、自らが僭主に納まるうと欲している
 のです、そしてプラトンは、あなたという統治者を、デ
 イオンの計画の道具にしてやるうとのみ心に定めている
 のです、と訴えるのを真に受けた。ディオニュシオスは
 しかし、プラトンの心映えを疑わなかつたし、自分に示
 された友情を意識して喜びもしたので、父親が同じ場合
 に為したのと正反対に振る舞った。すなわち、ディオ
 ーンを追い出して、プラトンの友情を得ようと努めたのであ
 る。³²とはいえ、プラトンも記述しているように、かれは、
 こうした友情を保証できたであろう唯一つの事柄だけは
 躊躇した。他にもない、プラトんに学んで、その弟子と
 なり、かれの政治的対話に耳を傾けるのだけは躊躇した。
 というのも、中傷者たちがこう囁いて、かれを不安で満
 たしていたからである、あなたの心は、あまりにプラト
 ンに依存しすぎた結果、「パイデアに魅惑され、統治
 者としての自らの責務を怠つて」³³いますよ、と。プラト
 ンは、粘り強く、この弟子のより深い欲求の目覚めを待
 ち続けた。けれども「肝心の弟子は、最後まで抵抗を止
 めなかつた」³⁴。それゆえプラトンは、アテナイに引き返

した。とはいえ、その頃に突発した争いが終結した時点で、改めて訪問しようかと約束しないわけにはいかなかった。かれは、何はともあれディオンのために、ディオニュシオスとの完全な決裂を避けた。この友を追放から呼び戻してもらおうと期待して、である。けれども、今の今まで、「何らのパイディアにも、さらには、自らの地位に相応しい何らの精神的交際にもおよそ触れた経験のない」僭主を、「統治の仕事に相応しい真の王に向けて教育し陶冶する」というプラトンとディオンの企ては、もろくも失敗した。

プラトンがなぜ、最初の伝道に失敗した数年後に、改めてディオニュシオスの招きに応じたかの理由は、容易に理解できない。かれ自身は、そうした原因として、シユラクサの友人たちの引つ切りなしの要請を、しかしながらとりわけ、南イタリアのピュタゴラス学徒や、偉大な数学者のアルキュタス、タレントウムを治めていたとその信奉者たちの要請を挙げている。プラトンは、シユラクサを去るに先立ち、ディオニュシオスとかれらの間に政治同盟を設けたのだが、この同盟は、今

回の招きを断ると破棄の危険に晒されたからである。⑧
ディオニュシオスはしかも、プラトンの辛い船旅を緩和するべく、わざわざ軍船をアテナイまで差し向け、もしも招きに応じるならディオンを追放から呼び戻そう、とまで約束した。④とはいえ、プラトンが最終的に腰を上げたのは、ディオニュシオスの周辺にいた友人たちやアルキュタスが、声をそろえて、ディオニュシオスの精神的陶冶は驚くほど進んでいる、と報告したからであった。④半ばはアテナイの弟子たちに押され、半ばはシケリアやイタリアの友人たちに引かれて、かれは、高齢にも拘らず旅立ちを決意した。この旅はしかし、かれの上に、最も深い失望をもたらすことになる。④プラトンの報告は、今回は、シユラクサに到着した折の歓迎の模様や政治状況には何ひとつ触れずに、もっぱら、目の当たりにした教育状況のみを述べている。僭主は、プラトンの不在中に、才気に溢れたあらゆる人たちと付き合い、かれらから耳にした思想で満ち満ちていた。④プラトンはしかし、この種の学習を続けても得られるものは皆無だと考えていた。かれは、その経験を介して、学習者の勤勉を計る誤

りのない試金石は、当人に、おのれの課題がいかに難しく、いかに辛いかをまず説明し、こうした説明が、当人にどう作用するかをじつと観察することだと考える。④ 本
 当の愛知（＝哲学）に満ち溢れた精神なら、克服すべき
 障害を認識した時点で、はじめて自らの哲学的欲求を強
 化し、その目的を達成するべく持てる力を目一杯に用い、
 さらに、助けを期待できる精神的指導者たちを目一杯
 に動員するだろう。他方、愛知の精神を欠いた人間は、
 要求される努力や汗、そして、まことに厳しい生活様式
 に躊躇して、こうした道を歩むことができない。にもか
 かわらず、かなりの人たちが思い誤って、われわれはず
 でに、すべてを理解しているから、さらなる汗と努力を
 免じられて当然だと考えている。⑤

ここに述べたのは、ディオニュシオスの場合であった。
 かれは、知者を装うばかりか、他の人たちから吸収した
 事柄を、あたかも自分固有の精神的財産であるかのよう
 に披瀝した。⑥ プラトンは、この箇所で、ディオニュシオ
 スはのちに、わたしから耳にした事柄についても同じ態
 度をくり返した、そればかりか、そうした事柄を扱った

本すらまとめて、当の事柄を自分固有の教えであると記
 したのである、と打ち明けている。ところで、この種の
 性向はつまらぬ代物ではない。そこには、ある種の精神
 的野心が顔を覗かせているからである。この野心はしか
 し、残念ながら、半可通の野心であった。伝承では、デ
 イオニュシオスが、失脚後はコリントスに居を定め、こ
 の地で授業を実施したと語られている。ちなみにプラト
 ンは、かれの教えを盗作したあの本について、単に伝え
 聞いて知っていたのみで、実際に読んだことは一度もな
 かった。この本はしかし、プラトンに、自らの著作活動
 について、また、著作活動と自らの教えがどう関わるか
 について、説明の機会を与えた。この種の説明は、すで
 に『パイドロス』で紹介されていたから、もはやわれわ
 れを極端に驚かせない。とはいえそれは、特有の言い回
 しのゆえに、注目に値する。わたしの認識の本質部分を、
 満足のいく文書様式にまとめることなどできない、とい
 う言い回しが、他にもないプラトンの晩年期に増えてい
 るのは、むしろ偶然ではない。かれが『パイドロス』で
 口にした中身、すなわち、書かれた本は、すでに認識さ

れた事柄を思い出させる点で価値をもつにすぎず、新たな知識を仲介する力など備えていない、が本当であるなら、プラトンのまとめた著作はすべて、当人には、教師としての口述活動の単なる反映でしかないことになる。この点は、次のようなタイプの認識に、すなわち、その他の知識のように、単に言葉を介して手渡されるのでなく、魂そのものが徐々に成長してはじめて現われ出ることのできる認識に、わけても当てはまるにちがいない。ここで論じられているのは、明らかに、プラトン哲学のそれ以外のすべてが、つまるところそこから自らの確信を引き出し、また、それらすべてがまさにその獲得に励むところの、神的な事柄の認識である。プラトンはここで、最後の問いを口にする。かれの教えと影響の全体、さらには、教育の価値をめぐるその見解は、まさに、この問いへの回答にほかならない。ところで、かれの思想の基礎をなし、それを支える最高の確信については、当人の手で書かれたものは一つとして存在せず、これからも存在しないだろう。^④ アリストテレスの神学は、少なくともかれの理念に従つかぎり、教育的な要件であって、

数ある学科目群の中でも最高の学科目となっている。プラトンはなるほど、われわれの精神が、これこそは哲学的パイディアだと『国家』に記述された知の段階的上昇を経て、おのれに付着した感覚的要素を洗い清め、かくして、何らの制約もない絶対存在にまで導き上げられるのが可能であるし、必要でもあると考えた。とはいえ、こうした段階的上昇には時間もかかるし、その頂点に至るには、一種の哲学的な生活共同体の中で、当の事柄に向けた問答法的努力の汗を一緒に数多く流さなくてはならない（ポレー・シュヌーシア）。プラトンは、まさしくこの箇所で、こうした上昇を遂げた人間の魂に灯される火花を、あの飛び火に譬えている。^⑤ここに描かれた認識　プラトンの手でその灯火が爛り起こされるは、まさに創造的行為であり、これに参与できるのは、しかも、わずかな指導と自らの力のみでそうできるのは、ほんの一握りの人間でしかない。

感覚的なものから本質の認識へと段階的に上昇することのプロセスは、僭主の教育が論じられてのち、プラトンによって『第七書簡』のいわゆる認識論的脱線の中で、

円という数学的実例を用いて視覚的に説明される。^④この箇所は、まことに難解であって、最近は様々の解説が試みられているけれども、常に、何らかの不可解さを残している。そこでの圧巻は、プラトンの教育の本質について、そしてまた、この哲学者の理解する学習の本性について、最終レベルまで論じられた叙述である。ここでは、こうした意味での認識が、対象との本質的類似という形で登場する。人間的なものと神的なものは、この地点で最高度に接近する。とはいえ、「神に似る」プロセスの最終目標である直視について、プラトンは一言も漏らさない（アレトーン）。^⑤同じく『饗宴』でも、魂が上昇して永遠の美を直視する行程は、あくまでも秘儀参入のプロセスとして描かれていたし、『ティマイオス』でも、万物の父である創造者（デミウルゴス）を見い出すのは困難だ、たとえ見い出せたにしても、かれの本質を明白に述べるなどできない、と語られている。もしもディオニュシオスが真にプラトンを理解していたなら、その認識も、プラトン自身にそうだったように、かれ自身にも聖なるものであったにちがいない。^⑥それにしても、

ディオニュシオスの出版は冒流行為であった。かれは、ここでの思想を自分の所有物だと言いつ張りうとして、あるいは、その資格もないのにバイディアを誇示したくて、われこそはこれに参与した人間だと思わせたいあまり、恥ずべき野心に駆り立てられ、冒流に手を染めたのであった。^⑦『第七書簡』の示唆からも明らかのように、プラトンがディオニュシオスに望んだ統治者の教育は、単なる技術的な統治業務心得ではなかった。それが目指したのは、人間全体の、さらには生活全体の改変であった。こうした教育を基礎づける認識は、神的な善という最高範型（パラダイグマ）の認識を描いてありえなかった。プラトンはしかも『国家』では、この範型を、統治者の拠るべき基準ないし尺度として設置する。こうした認識に至る道も、『国家』の場合と同じく、数学と哲学的問答法を行ずる道であった。プラトンは、僭主との会話では、ここでのバイディアの輪郭を画定するに留めていたように思われる。とはいえかれは、明らかに、自らの厳しい要求項目を一つとして捨てまいと決意していた。この世には、王の術というゴールに導く王の道など存在し

ない。ディオニュシオスという僭主は、プラトンから耳にした事柄への対応を介して、おのれの精神が、王という職業のそもその源が横たわる深みに達するに値しないのを立証した。当然ながら、この職を全うしようと励んだかれの努力も、つまりは無駄に終わったのである。

『第七書簡』の大いにドラマチックな最終部分には、プラトンとディオニュシオスの仲が決裂し、この僭主からどうした制裁を被ったか、の実際がたつぷりと記されている。こうした場面は、書簡の中心部を占めるプラトンのパイディアの叙述と、まことに有効で鋭いコントラストをなしている。プラトンは、すでに『ゴルギアス』で、自らのパイディアの哲学を、力の哲学に対峙させていた。ディオンは、その当時、自らの資産　ディオニュシオスの王国から持ち出せなかった　で異国生活を送っていたのだが、この資産も没収され、約束の追放解除も反古にされた。プラトンは、しばらく、外の世界との接触を断たれた囚人として僭主の宮殿で暮らしたのち、最後には、護衛たち　敵意を剥き出しにして生命をも脅かした　の兵舎に移された。タレントゥ

ムのアルキュタスは、密かにこれを伝え聞いて画策し、ついに、プラトンのアテナイ帰還を僭主に認めさせた。プラトンは、帰還の道すがら、オリュンピアの祭典で追放中のディオーンと落ち合った。その際、かれの報復計画を打ち明けられたが、準備支度への参加は断った。プラトンは、ディオーンと交わした盟約を、『第七書簡』の他の箇所で、「自由なパイディアの共同体（エレウテラス・パイディアス・コイノーニア）^{⑤⑦}」と称している。この共同体はしかし、友に従って力の道に踏み出すのを義務づけなかった。かれが準備していたのは、あくまでも、ディオーンとディオニュシオスの和解であり、事実、これは申し出られた。^{⑤⑧}とはいえかれは、ディオーンが、アカデメイアの学徒から共鳴者　かれの解放軍に志願兵として加わる　を尊るのを禁じなかった。シュラクサでの僭主制の崩壊が、アカデメイアの精力的支援を欠いたなら実現すらおぼつかなかったにしても、プラトンはやはり、こうした展開を悲劇として捉え、双方の当事者が失脚したのち、アウトイ・アイテイオイ（かれらの破壊の責任はかれら自身にある）というソロンの言葉を、

かれらの背後から浴びせかけた。⁵⁹⁾

シケリアのドラマは、実のところ、シユラクサの王家の犠牲となった両メンバーに悲劇であったばかりでなく、ある意味では、プラトンにも破局から外的に遠ざかっていたとはいえず、悲劇であった。かれは、冒険的企ての成功を疑いつつ、もてる力のすべてをこれに投入し、それゆえこの課題は、かれ固有の課題となっていたからである。ところで、プラトンの誤りは、政治生活や政治活動を規定している「諸条件」を全く理解できなかつた点にあり、この誤りはだから、プラトンの国家理念の本質に位置している、などとよく口にされてきた。すでにイソクラテスは『フィリッポス』で、実際生活に何ら必要のない国政や法律を記述する人士について、揶揄を交えて語っていた。⁶⁰⁾ この作品がまとめられたのは、前三四六年のことで、それゆえ、プラトンの死後まもなくということになる。これを介してかれは、おそらく、国家問題と格闘するプラトンの試みに最終判定を下した、と考えたにちがいない。イソクラテス自身は、自らの理念が、プラトンの場合と同じく、当時の政治家

連中の視点をはるかに越えていたとはいえ、現実政治に応用もでき、実り多い点を何よりも誇っていた。こうした批判はしかし、実のところ、プラトンに当てはまらない。プラトンの最善の国家と政治的現実の間には、底知れぬ原則上の裂け目が介在する。とはいえかれは、これをはつきり自覚して徹底的に強調する。⁶¹⁾ ここでの知恵とこの世の権力を合体できるのは、一種の奇跡を描いてなかつた。シケリアでの企ては、首尾そのものが大きく疑われつつ着手されたとはいえず、失敗に終わった。これによつてかれは、なるほど、自らの理想が生前に、あるいは一般にいつの日か、実現された姿で目にできる望みを失つたにちがいない。このことはしかし、これ自体がかれの理想であり、絶対尺度であり続けるのを改めなかつた。プラトンがもつと大衆心理学に通じていたなら、あるいは、宮廷風のしなやかさを身に着けていたなら、かれの捉えた最も高尚なもの・最も神聖なものを、あえてこの世界に受け入れさせることもできたろうに、などと考えるのは間違っている。というのもかれは、医者が患者を診察して重症だと語るように、この世界を、まこ

とに重症だと診断したからである。国家へのかれの関心は、この意味で、総じて政治的ではなかった。われわれが試みた『国家』の精神構造やプラトンの政治家概念の分析は、この点を、疑問の余地のないものにした。シュラクサでの破局は、それゆえまた、一般には、生涯にわたるプラトンと国家の関わり合い、および、哲学に国家を統治させるべしと訴えるかれの要求、を称して語られた人生の夢を、あるいはむしろ、「人生の嘘」を、何ひとつ壊さなかった。

われわれがすでに見てきたように、政治への積極的関与の断念は、早くも、プラトンが執筆活動に着手する以前にさかのぼる。かれは、すでに『弁明』で、はつきりとこれを口外していた。もっとも、そこに挙げられた政治的関与は、あくまでもアテナイを対象としたものであった。けれども、たとえディオオンが、プラトンとはじめて知り合った時、あなたの理念の実現は、独裁的統治者に支配された国でいっそう容易になりますよ、と理論的に納得させようと試みたにしても、この理念が果たして、本当に実現されるか否かの問いを前にし

たプラトンの戸惑いは、『国家』での姿勢が証明するのと何ら異ならなかったように思われる。たとえかれが、弟子や友人たちの、わけてもディオオンのオプティミズムに煽られたあげく、ともかく、こうした抵抗の放棄を決定したにしても、実際の関与の失敗は、すでに予想されていたとはいえ、人間共同体の本質への、さらには、パイディアがそこに中心的位置を占めることへの自己見解に、ほとんど疑念を抱かせなかった。そうはいうものの、シュラクサで体験された事柄はやはり、プラトンには悲劇であった。それは、かれのパイディアへの打撃であった。なるほどそれは、パイディアの哲学的真実を反証するものではなかったが、かれの実践的教育力を、誤った場所に投入した好例であった。これへの罪を問われるべきは、何よりもまず、こうした実験にプラトンを駆り立てた当の友人たちであった。ディオオンは、確かに、シュラクサの政治的局面へのプラトンの関与に直接の関心を抱いていたとはいえ、単なる利己的動機から、こうした冒険への巻き込みを図ったなどは考えられない。プラトンの人間認識は、僭主の人となりを誤りなく査定した

とともに、きわめて身近かな友人（『ディオーン』）についても、そう完全に狂うことはなかった。

それゆえ、こうしたエピソードを介して明らかにされるディオーンとプラトンの姿勢上の差は、単に、的を外さぬ本能に基づいたプラトンの英雄的あきらめを、純粹で溢れるばかりの、しかしながら深さに欠けた軽信的なディオーンの理想主義から鋭く切り離す効果をもつにすぎない。プラトンは、シュラクサの地に立憲政治を樹ち立てる、というディオーンの目標に公然と合意したものの、『第七書簡』ではこの意味で、徹底してディオーンとの差を際立たせ、それによって自らの特徴を三示そうと望んだ。すぐれた観察眼をもつ読者には、この点が、驚くほど確かなものに映る。プラトンは、政治手段としての革命を原則的に拒絶する^⑤。とはいえ、シュラクサでの体験をへて、自らの理想が立法的な手段を介していつそう早く実現されるなども、以前ほど容易に信じなくなったにちがいない。キリスト教徒なら、共感しつつこう呟くだろう。プラトンの犯した名誉ある錯覚は、あくまでも、その構築に向けて励みに励んだ精神の王国を、総じて、あ

の世ならぬこの世に求めた点にある、と。シケリアでの出来事について、さらには、この出来事でプラトン自身の占めた位置について、世の評価に支配的な誤りを正す何よりのものは、他でもない、内的に平然としたプラトンの姿勢である。この姿勢から来る感銘を、誰しも、容易には免れがたいだろう。こうした姿勢は、鍛え抜かれた魂の強さに由来する。この強さを介して、かれは、この世のあらゆる現象の内にはつきりと確認される神的なバランスを、圧倒されるほど見事に、自らの内に体現できたからである。われわれとしては、こうしたプラトンの個人的記録を、『アンティドシス演説』でのイソクラテスの自己弁明と比較しないわけにはいかない。プラトンもイソクラテスも、結局は、おのれの個人的抱負とその運命を世に問わなくてはならなかったけれども、これ自体は、確かに時代の重要な兆候といえる。プラトンは、『第七書簡』の背後に漂う溢れるばかりの個性を、圧倒的な仕方であれわれれに感じ取らせてくれる。まさにこれこそ、『第七書簡』が真作である証拠として、いくら評価してもし過ぎることはない。

- ① エラストスとクリスコス プラトンの弟子で共にアッソスを治めていた、さらには、アタルネウスのヘルミアス 隣国の僭主で上の二人と哲学同盟を結んでいた に向けて記された『第六書簡』については、わたしの『アリストテレス』一―二頁を参照のこと。この書簡を、プラトンの真作と見なすプリンクマンとわたしの根拠は、ヴィラモヴィツその他によって是認されている。このことはしかし、ここでは直接に関係しない。
- 『第七書簡』と『第八書簡』の真作性については、ヴィラモヴィツ『プラトン』第二巻と、最近のG・パスクアリ『プラトン書簡集』(フロレンス、一九三八年)を参照のこと。一握りの学者たちは、すべての書簡集がプラトンの真作であると想像しているけれども、こうした主張は、克服困難なハードルにぶつからざるを得ない。
- ② 『第七書簡』の報告内容は、今日ではたいへい歴史的に正当と認められている。この正当性は、われわれのその他の、基本的にさらに後の伝統とも一致しない、細目群についても当てはまる。R・アダム『項目』(ヘルリン、一九〇六年)七頁以下を参照のこと。
- ③ クセノフォン『ソクラテスの思い出』一卷二、三九
- ④ プラトン『第七書簡』三三六E以下。
- ⑤ 『第七書簡』三三四B。
- ⑥ 『国家』五九二B。
- ⑦ 『国家』四九九C。
- ⑧ プラトン『国家』の類比物ないし手本がエジプトである点は、すでに早くから指摘され始めていた。これについては、プラトン『ティマイオス』へのプロクロス注釈書(第一巻、七五頁)のクランツールを参照のこと。さらには、わたしの『カリュストスのディオクレレス』一―二八頁、一三四頁以下と、『ギリシア人とユダヤ人』(宗教ジャーナル、一九三八年)も参照のこと。
- ⑨ 『国家』五九一E。
- ⑩ 『国家』五〇一A、『第七書簡』三三二E以下。
- ⑪ 「最善の国家」はミユートスである(『国家』五〇一E)。とはいえ、哲学的な「王の息子」のみがこれを実現できた(『国家』五〇二A B)。
- ⑫ 『法律』三巻六九C。
- ⑬ 『国家』が執筆されていた当時、すでにディオオンが、若いディオニュシオスに大きな望みを託していたため、プラトンは、こうした戸を開けたままにしておいたのだと考えられなくもない。とはいえ、かれの話しかける相手は、王家の血を引く若い王子で、現に君臨する王でないのは明らかである。当の人物は、いっそう教育されなくてはならないのだから。
- ⑭ 『第七書簡』三二七以下。
- ⑮ 『国家』四七三D。

- ①⑥ 『国家』四九九B、『第七書簡』三二六A B、三二七Eその他も参照のこと。テュケー（運命）という名称自体は、プラトンではよく入れ替わる。とはいえ、意味されている中身は、ここでもそれ以外でも異ならない。
- ①⑦ 『第七書簡』三二七E以下。
- ①⑧ われわれは、こうした状況の自覚がイソクラテスでも述べられていたのを見た。
- ①⑨ 『第七書簡』三二七C。
- ②⑩ 『第七書簡』三二八A。
- ②⑪ 『第七書簡』三二四A。
- ②⑫ 『第七書簡』三二六E、この箇所解釈では「ドイツ評論」（一九二四年）八九七頁を参照のこと。
- ②⑬ 『パイディア』一巻八三頁を参照のこと。
- ②⑭ 『国家』四九二A、四九二E 四九三A。
- ②⑮ 『第七書簡』三二八A。
- ②⑯ 『第七書簡』三二六B。
- ②⑰ 『第七書簡』三二八B。
- ②⑱ 『第七書簡』三二八C。
- ②⑲ 『国家』四九六C E。
- ③⑰ 『第七書簡』三二九B。
- ③⑱ 『第七書簡』三二九B以下。
- ③⑳ 『第七書簡』三三〇A B。
- ③㉑ 『第七書簡』三三三C。この箇所はなるほど、プラト
- ンが、ディオニュシオス 世を二度目に訪問した折に被った中傷を語ったものとして引用される。とはいえ三三〇Bは、若いディオニュシオスの宮廷に最初に滞在した際のプラトンへの陰謀も、まさに、同じ嫌疑を利用して示している。
- ③⑳ 『第七書簡』三三〇B。
- ③㉑ 『第七書簡』三三二D。
- ③㉒ 『第七書簡』三三三B。
- ③㉓ 『第七書簡』三三九D。
- ③㉔ 『第七書簡』三二八D。
- ③㉕ 『第七書簡』三三九A。
- ④⑰ 『第七書簡』三三九C。その前の滞在時に、プラトンの出発に先立ってディオンを呼び戻す、と語ったディオニュシオスの約束については、三三八Aを参照のこと。
- ④⑱ 『第七書簡』三三九B。
- ④㉑ 『第七書簡』三三九D E。
- ④㉒ 『第七書簡』三四〇B、三三八Dも参照のこと。
- ④㉓ 『第七書簡』三四〇C。
- ④㉔ 『第七書簡』三四一A。
- ④㉕ 『第七書簡』三四一B。
- ④㉖ 『第七書簡』三四一C。
- ④㉗ 『第七書簡』三四一D、三四四Bも参照のこと。
- ④㉘ 『第七書簡』三四二B。

⑤0 J・ステンツェル『ソクラテス』(一九二一年)六三頁と、同『教育者プラトン』三一一頁、さらにはヴィラモヴィツ『プラトン』第二巻、二九二頁を参照のこと。ステンツェルは、プラトンはここでは、問答法的活動という骨の折れる道を一步一步と歩みもしないで、プラトン哲学の全体を「天才的直観に訴えて」理解しようとするディオニュシオスの無益な試みを、大いに詳しく叙述している、というのかもしれない、こうしたディオニュシオスの姿を介して、真のパイディアの何であるかを悟らせようとするのだから、とまことに見事に明示している。ある学者たちは、この重要な政治事件の報告には認識論的脱線が含まれていない、と繰り返し語った。他の学者たちは、全体の本物性を「救う」ために、この箇所は挿入である、と説明した。こうした連中はすべて、『第七書簡』でプラトンが、ディオニュシオスの事例を用いて、自らも一役を演じていたセンセーショナルなドラマでなく、まさに、パイディアの問題を描いているのを理解していなかった。この種の学者たちは、プラトンの自負心を明らかに過小評価していたのである。

- ⑤1 『第七書簡』三四一C。
 ⑤2 『ティマイオス』二八C。
 ⑤3 『第七書簡』三四四D。
 ⑤4 『第七書簡』三四四C。

プラトンとディオニュシオス

- ⑤5 『国家』五〇〇E。
 ⑤6 『第七書簡』三五〇B以下。
 ⑤7 『第七書簡』三三四B。
 ⑤8 『第七書簡』三五〇D。
 ⑤9 『第七書簡』三五〇D。
 ⑥0 イソクラテス『フィリッポス』一一。
 ⑥1 わけても『国家』五〇一Aを参照のこと。
 ⑥2 『第七書簡』三五〇Cは、ディオオンが、プラトンに催促してシユラクサまで足を運ばせた際に用いた倫理的圧力について、きわめて力強く、プラトン当人の胸の内を述べている。プラトンはこれを、一種の暴行(ピア・ティナ・トゥロボン)と呼んでいる。
 ⑥3 『第七書簡』三三一B、D。

訳者あとがき

ここに和訳したのは、もはや古典の中に教え入れられてよい、W・イエーガーの『パイドイア』である。「ギリシアの人間の形成過程」という魅力に溢れたテーマを一貫して扱った作品は、しかし、ドイツ語原典ではほゞ二二五〇頁にも及ぶ大著であることや、その他の事情も手伝って、わが国ではこれまで和訳の機会に恵まれることはほとんどなかったと言つてよい。

というのも、ギリシア哲学を専攻するフロパーの研究者には『パイドイア』は、実証主義的な今日の学会上の動向がらみでまさに一昔前の研究として位置づけられ、それゆえ、今なら和訳でもあるまいと結論されざるを得ないだろうし、他方、教育哲学を専攻する同様にフロパーの研究者には、ギリシア・ローマ精神とキリスト教という、西欧の伝統を形造った二つの源流の一方を把握する上に、『パイドイア』が与えるであろう示唆と情報の豊かさが、とりわけ十分に自覚されているにもかかわらず、ギリシア原典にギリシア語で接した者にも把握可能な細部も少なくないことから、結果として、和訳への取り組みも躊躇されざるを得ないだろうからである。

『パイドイア』はこうして、ギリシア哲学の研究者にとつても、また、教育学の研究者にとつても、和訳の上でのエア・ポケットであったと言つてよい。けれども、作品の重要性を考えるなら、和訳の試みは、何らかの時点で、何らかの人の手を借りて始められなければならない。そうした「人の手」の一つと

して、わたしが、及ばぬながらも名乗り出て、すでに一〇数年が過ぎた。その間の成果は、『順正短期大学研究紀要』第一九〜二三号』と『国際教育研究所紀要』第五〜一一号』、そして『大阪学院大学・国際学論集』第一巻(二号)』に一応は公表されている。この作業は、今後、『立命館文学』に引き継がれることだろう。

和訳にあたっては、テキストに『PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN, VON WERNER JAEGER, WALTER DE GRUYTER, BERLIN, NEW YORK, 1973』を用い、参照英訳には『Paideia: the Ideal of Greek Culture, trans. by GILBERT HIGHET, vol. I, II, III, OXFORD, 1965, 1969, 1969』を用いた。ハイエットの英訳の具体性に比べると、イエーガーの原典は、ドイツ語に特有の抽象性にあふれ、そのまま直訳したのでは、文意の明瞭化はとつてい図りたいところから、この和訳では、かなり大胆な意訳もあえて辞さなかった。和訳のそもそもの狙いが、『パイドイア』の自身を広く一般に紹介する点にあったからである。

『パイドイア』の全体は、その「目次」も語るように、次のような構成をもつ。すなわち

前書き

序論 人間教育の歴史に占めるギリシア人の位置

第一卷 アルカイック期のギリシア

(1) 貴族とアレテー

(2) ホメロス貴族の文化と教育

(3) 教育者としてのホメロス

(4) ヘシオドスと農民気質

(5) スパルタの国家教育

a 教育様式としてのポリスとその諸形態

b 前四世紀におけるスパルタの理想と伝統

c テイルタイオスによる徳への呼びかけ

(6) 法治国家と市民理想

(7) イオニアとアイオリアの詩に登場する個人の自己

形成

(8) ソロンとアテナイのポリス教育の始まり

(9) 哲学的思索とコスモス(世界秩序)の発見

(10) 闘争と貴族の栄光

a テオゲニスの作品の伝播

b 貴族教育の伝統の成文化

c ピンダロスの貴族信仰

(11) 専制君主の文化政策

第二卷 アテナイ精神の絶頂と危機

(1) アイスキュロスの悲劇作品

プラトンとディオニュシオス

(2) ソフォクレスに登場する悲劇的人間

(3) ソフィストたち

a 教育史的現象としてのソフィスト

b 教育学の源と文化理想

c ポリスの危機と教育

(4) エウリピデスとその時代

(5) アリストパネスの喜劇作品

(6) 政治思想家としてのツキディデス

第三卷 偉大な教育者と教育組織の時代

(1) 前四世紀

(2) パイディアとしてのギリシア医学

(3) ソクラテス

a ソクラテス問題

b 教育者としてのソクラテス

(4) 歴史におけるプラトン像

(5) プラトン『ソクラテス小対話篇』… 哲学問題としての徳

(6) プラトン『プロタゴラス』… ソフィスト的パイディアか、ソクラテス的パイディアか

(7) プラトン『ゴルギアス』… 真の政治家としての教育者

(8) プラトン『メノン』… 新たな知の概念

(9) プラトン『饗宴』… エロース

育者

(8) プラトン『メノン』… 新たな知の概念

(9) プラトン『饗宴』… エロース

- (10) プラトン『国家』
- a 序論
 - b 正義をめぐる問題からの最善国家の理念の発生
 - c 古いパイデアの変革
 - d 音楽教育の批判
 - e 体育と医学の批判
 - f 正しい国家における教育の位置
 - g 婦人と子供の教育
 - h 人間の選別と最も優れた者の教育
 - i 戦士の教育と戦時法の改変
 - j プラトンの国家 哲人の「生活空間」
 - k 統治者のパイデア
 - l 数学の研鑽
 - m 哲学的問答法の教育
 - n 人間の魂の病理学としての国家形成論
 - o われわれの内なる国家
 - p 詩の教育価値
 - q パイデアと終末論
- (11) イソクラテスの弁論術と教育理想
- (12) 政治教育と市民の想い
- (13) 指導者の教育
- (14) 急進民主政における権威と自由
- (15) 自らのパイデアの中身を弁明するイソクラテス
- (16) クセノフォン
- (17) プラトン『パイドロス』…哲学と弁論術
- (18) プラトンとディオニュシオス…パイデアの悲劇
- (19) プラトン『法律』
- a 教育者としての立法家
 - b 法の精神と真の教育
 - c 国家没落の諸原因について
 - d 国家の創設と神の規範…法の前文
 - e 国民教育のための法
 - f 統治者の教育と神の認識
- (20) デモステネス
- (21) 第三巻の注釈
- 「こつした地平と視野を備えた『パイデア』の和訳を、ここでは、前回までの公表順序につなげて、便宜上、第三巻の(18)から、すなわち「プラトンとディオニュシオス…パイデアの悲劇」から始めてみたい。
- (本学文学部教授)